

シンポジウム

教科専門教員からみた教育デザイン

教育学研究科社会系教育

多和田 雅 保

教員養成を行う場で教科を専門とする大学教師にとって、学生指導と自分の専門性とがどのように関わるのかという問いは、常に切実なものである。私は本学に赴任してまだ2年たらずだが、学部と大学院で現在行っている授業実践を簡単に紹介し、右の問いに関する自分なりの現在の見解を述べたい。

私は社会科教育講座（学部）と社会系教育専攻（大学院）に属し、日本史（近世史）を担当している。この場合、結果的に学部では多くの学生が自分と同じ近世史を専攻し、古文書読解を基礎とした専門的な学習を行うことになる。しかし実際問題として、大学院では学部と学生の入れ替わりが激しく、授業の参加者のほとんどは日本史の専門的なディシプリンを身につけていないし、またこれを求めることもさほど現実的とはいえないだろう（指導生は別として）。それでは質の高い教員養成を行うために、自分の専門性をどのように発揮すればよいのか。私が今年度、初めて大学院を担当するにあたり、最初に思い悩んだのはこの点だった。

そこで結局、大学院では各地で出版されている自治体史をテキストとしてとりあげ、講読を行うことにした。すなわち、参加者が『横浜市史』、『春日部市史』、『品川区史』など、自分の出身地や自分の専門と関連する場所（たとえば自然地理の学生であれば、自分がフィールドとする山系に関する歴史の文献）を自由に選び、20～30頁ほどの任意の章について議論する、という方法をとることにしたのである。

戦前以来、日本の多くの都道府県や市町村などでは、膨大な量の自治体史（郷土史、地方史）が刊行されてきた。これらはきわめて高度な内容を持ちながら、基本的にはそこに暮らす市民を読み手として想定している。少なくとも「通史編」については平

易に書かれている。ただしもったいないことではあるが、よほど歴史に興味を持たない限り、市民が日常的にこれを手にとって読む機会は少ないと思われる。そしてこの事情は、その地域の学校に赴任している教員においても同様なのではないだろうか。

歴史分野に限らず、日本各地における地域研究の蓄積——地元の自然・文化・経済・行政などに関する研究書や平易な読み物——は、膨大なものがある。そしてそれらの資料はたいへい、それぞれの地元の図書館の「郷土資料コーナー」などで閲覧可能である。すなわち郷土資料コーナーは、市民と地域とを結びつける極めて重要な回路としての意味を持つといえよう。ではどれだけの教員がそこに足を運び、データを活用できているのだろうか。

私はどこであれ、学校（特に公立校）というものはすべからず地域に根ざした存在であるべきだし、教員は赴任先において、学校にこもることなく地域と積極的に関わっていく姿勢が必要だ、と考えている。そのためいかなる教科の専門であれ、教員が「地域を見る眼」を養うことはきわめて重要だと考えるものである。このことは授業の場ではもちろんのこと、それ以外の局面でも同様である。私が大学院の授業で地域史をとりあげることとした積極的な理由はここにある。

ところで私が本学に赴任する前に勤務していた飯田市歴史研究所（長野県）の設置目的は、専門知識を持つ研究スタッフが地域の歴史を研究し、「地域市民」に分かりやすく成果を還元することだが、それと同時に、「地域市民」のなかから地域の歴史研究を主体的に行う人材が育つことも重視しており、教育活動にもかなりの力を入れている。この場合の「地域市民」というのは、年齢（子どもも）・性別・国籍・職業を問わず、その地域に関わるあらゆる人々が

含まれるが、それでもやはり地元の学校の教員の存在はきわめて重要である。しかし研究所と学校の教員との連携という点では、多くの課題が残されている。

現在、小学校や中学校をとりまく状況は大変厳しい。「教員は雑務で忙しいんだから、自分の専門性を磨く暇などない」といった声もよく聞くところである。かつて（戦前から戦後しばらく）、小学校や中学校の教員は、地域に根ざした歴史・文化・自然などの専門研究を事実上牽引してきたし、長野県などでも地域研究のもっとも主要な担い手といえばこれらの教員たちであったが、近年ではこうしたことはきわめて難しくなっている。しかし実は、教員と地域との関わりは以前にもまして求められているのではないだろうか。

ただし、私が教員と地域との関わりを重視する第一の理由は、何も「郷土愛」の涵養を重視するからではない。子どもが社会性を身につける過程で習得すべき事柄が、成長の場としての地域に豊富に存在すると考えるためである。

地域史に関する学びは、「歴史の全体像」の学びと密接に関連している。子どもが歴史を考えるうえでもっとも重要な事柄のひとつは、過去に生きた人々の具体的な暮らしぶりを可能なかぎりリアルに想像することであり、それは私の専門とする日本の江戸時代に限らない。ほかならぬ教員自身がこの点を自覚し、見識を深めようと努めることが必要である。しかしその場合、地域と無関係な人の暮らしは本源的にはありえないわけであり（現代我々はこの点において大きな岐路に立たされているが、であればなおのこと）、具体的な場にそくした人の暮らしの考察が重要ということになるのではないか。

私は今年前期に学部で担当した「日本史概論Ⅰ」で、15コマのうち1コマずつを「稲の作り方」、「製糸」、「紡績」に割り当てて説明した。このうち製糸と紡績については授業の導入で、「そもそも絹とか木綿ってどんなモノか具体的に想像できる？」と学生に尋ねてみたが、予想どおり(!?)はかばかしい返事はなかった。製糸や紡績などの用語についてはいわずもがなである。しかしこのままだと、たとえば教科書に必ず出てくる「富岡製糸場」の名前を教えることはできても、そこでの生産技術や労働力、生

産物などの歴史的な位置づけについては、まるで説明できないことになってしまう。

絹と木綿は、①前近代から近現代の日本全体の流れを強く規定し続けたが、②列島内の各地域においても、住民がどちらの生産・流通にいかに関わったかによって、地域固有の生活文化に大きな影響を与えてきた。そして重要なのは、①と②が密接に関連しているということである。

自分の幼少期の記憶では、生まれ育った集落（岐阜県南部の近郊農村）のなかに、家族経営規模の縫製屋や織物の小工場がいくつもあり、きわめて身近な存在だった。たとえばこうした地点から発展させることで、自分の生活を大きな歴史のなかで理解することが可能となるのではないだろうか。

なお、以上のような大学での実践は、教員養成のスキルの深化と同時に、自分の専門性の深化にも寄与しうる、と私は考える。

私の属する歴史学界では、これまでもいかにして学問の専門性と現実社会における現代的課題とを結びつけるかについて、議論が分厚く積み重ねられてきた。ほかの専門分野については不案内だが、何であれ、社会との関わり方が常に問題となるという点は共通しているはずである。しかし専門性の高い学問の世界と、多様な価値観からなる現実社会とを結びつけることは、実際にはなかなか困難である。その点で、本学部や本大学院のような場での実践は、これらを結びつけるための重要な回路のひとつたりえると考えられる。そこで得られる知見は、自分の属する学界に対して、社会との関わり方に関するさまざまな問題を提起し、研究の水準を引き上げる。翻ってこのことが再び、教員養成教育の質のさらなる向上に結果する可能性を持つ…。

かかる立場に基づいているため、私自身は教員養成を目的とした授業を「余業」であるとはまったく思っていない。しかし以上についてはあくまでも自分が経験に基づいて「我流」で考えていることに過ぎず（むしろそのことにこそ価値がと考えるが）、本学部、本大学院の他の分野の教員との間で本格的に議論したことはない。ここから出発して新たな教育デザインのありかたを探っていくことは、ひとつの有効なアプローチだと考えているのである。